

―探求・川にちなんだ万葉集の歌―

万葉の川心 第28回

横浜市立綱島小学校教諭 船田 園子

羈旅にして作れる歌九十首のうち一首（巻第七 一一七四番歌）

霰降り鹿島の崎を波高み

過ぎてや行かむ戀しきものを

どうしてこんなに心惹かれるのだろう。もう長いこと、その前から動けないでいる。出会うことが決まっていたような、ずいぶん前から探し続けていたような自分の心とびったりあった物と出合ったとき、どうしようもない衝動が生まれることがある。

物が語りかけてくるといつてもいい。自分に向かってオーラを出している。何でそんな物買ってきたの。どこに置くの。そんなに値打ちがあるの。家族の声が耳をかすめては消えていく。「なぜ」とか「どうして」とかそんなことを説明する以前の出合い。しいて言えは運命だろうか・・・などと言えば笑い飛ばされるに違いない。

まして、旅先ともなれば、想いはますます募るのである。「ここを立ち去れば、もつ会えないかもしれない。ちょっと考えて出直すことができない。決めるならば今だ。

「これください。」と、ポケットマネーで簡単に買える物だったら悩むこともない。手に入れるには、ちょっと贅沢。きりつめれば何とかなるものだろうか。や、苦しいな。でも、それがそばにあるとどのくらい心が豊かになるだろう。そんなことを心の中でぐるぐると考えあぐねる。人間だけがもつ、物との会話を楽しむ時間。だが、店主もいぶかしげに見ている。そろそろ決めなければ・・・。

霰が降るとその音は喧しい（かしましい）。そこから「霰降る」は「鹿島」を

導く枕詞となっている。常陸の国の鹿島神宮は、巻の二十でも詠まれている。その茨城県鹿島、利根川河口を旅したときに詠める歌「鹿島の崎を、波が高いからといってただ行き過ぎてしまつてよいものか。こんなに心ひかれるものを」せつかくここまでできたのだから、ぜひ鹿島の崎を見てみたい・・・その地に恋いこがれることもある。一生のうち一度は行きたい場所がある。見たい景色がある。

世間の荒波、それがどんなに高くても、あなたに会いたい。ただ通り過ぎるにはあまりに恋しい。たとえ、人生の途中といつても・・・人に恋することもある。「過ぎる」という言葉は、万葉集にもいくつが出てくる。「二人行けど行き過ぎがたき秋山を（一〇六番歌）」「春過ぎて夏来たるらし白たへの（二八番歌）」。そして、巻十七「花は過ぐとも（散つてしまつても）」、巻二十では「黄葉の過ぎにし君が形見とそ」と、「死」という意味にもつかわれている。過ぎてしまえば懐かしいこと、されど、ただ通り過ぎるにはあまりに寂しい出会いがある。単なる偶然を運命にしたくなる出会いがある。

写真は、鹿島の南、千葉県銚子から見た利根川河口に落ちる夕日である。川の出口は、海のように広く、すべてを包み込むように穏やかだった。

店を出ると、もう日が沈みかけていた。包みを脇にかかえて、今日はいい日だったと独りごつ。結局、買ってしまった。いや、出合つてしまった。それだけだ。



利根川河口（銚子）にて